ファンがつくる 金沢競馬をもっと楽しむ情報誌

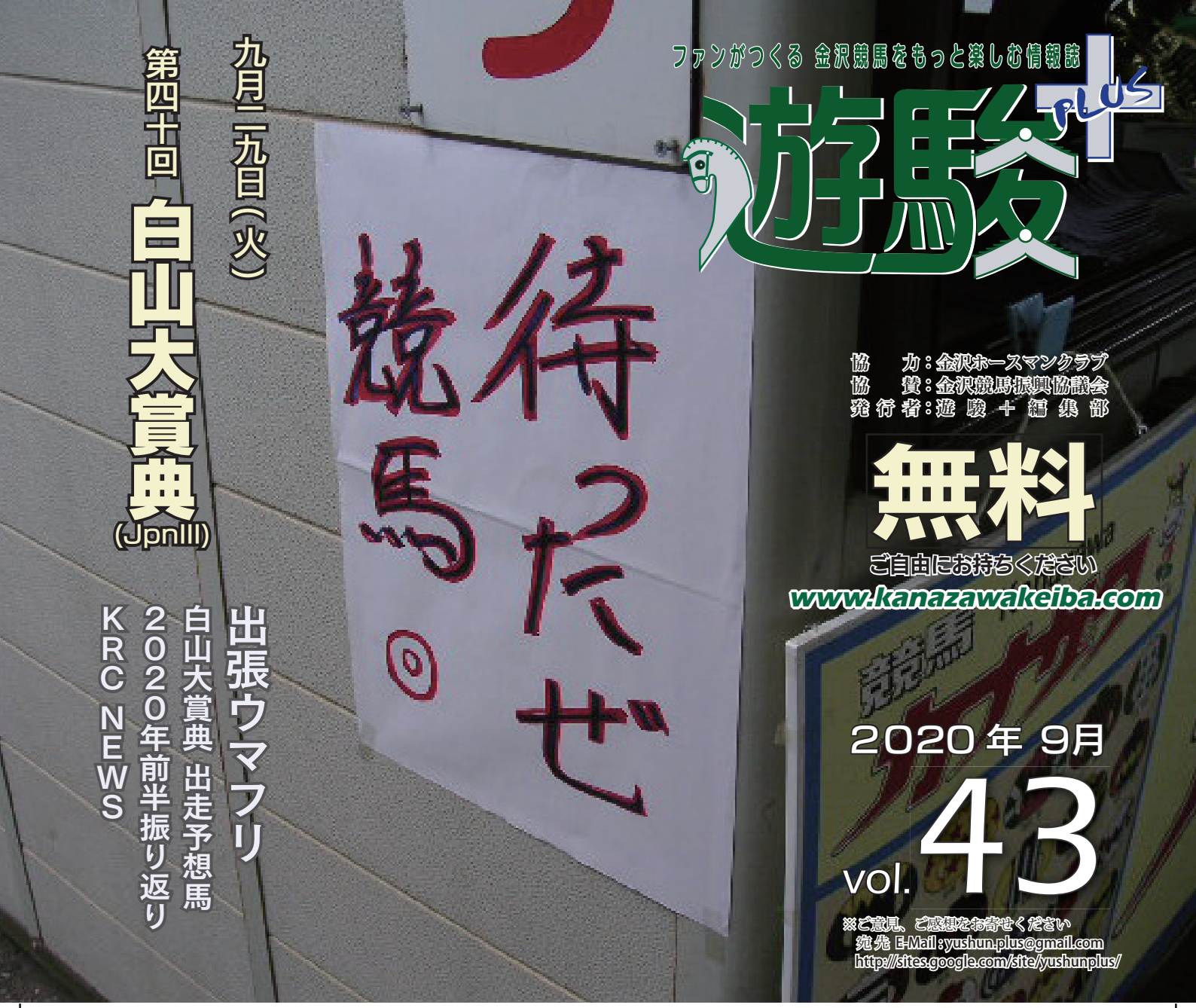
遊駿+plus

協　　力：金沢ホースマンクラブ
協　　賛：金沢競馬振興協議会
発行者：遊駿＋編集部

無料
ご自由にお持ちください
www.kanazawakeiba.com

2020年 9月
vol. 43

※ご意見、ご感想をお寄せください
宛先 E-Mail：yushun.plus@gmail.com
http://sites.google.com/site/yushunplus/



九月二九日（火）
第四十回 白山大賞典 (JpnIII)

出張ウマフリ
白山大賞典 出走予想馬
2020年前半振り返り
KRC NEWS

開幕の辞

ヘンシューチョー

二月二十七日、新型コロナウイルス感染拡大により大井競馬から始まった無観客競馬は他の地方競馬、中央競馬に拡大。競馬場からファンの姿が消えた。

三月十五日、金沢競馬が冬休みから開けて再開。そこにもファンの姿はなかった。ファンいない競馬場にファンのためのフリーペーパーである「遊駿+」を置いても意味がないので、今年の開幕号は再びファンが競馬場に来るタイミングで出すことになった。

スプリングカップの頃には行けるかな？北日本新聞杯辺りかな？石川ダービー、いや悪くても百万石賞、いやいやMRO金賞で……

今年最初の号を出すタイミングを色々計って来たが、無観客開催継続で全て叶わず。

……ひょっとして、このまま年内出せないのか。

そう思った時もあったが、あの日までにはお客さんが競馬場に戻ってくるであろう、戻ってくるに違いない、戻ってきてほしいと思い、まだ何にも決まっていない中でこの原稿を書いている。

あの日とは、九月二十九日。白山大賞典の開催日。

金沢競馬唯一のダートグレードが無観客で行われるのは余りにも寂しい。この日までには、どんな形かはわからないが「無観客」と言う文字はなくているだろう、なくなっていてくれ、そんな思いでいる。

それを果たす為にも競馬関係者は様々な努力と対策を重ねている。待ち望むファンも罹らないように、うつさないようにと日々の対策を行っている。それが噛みあっての観客を入れた開催になる。その日が来ても対策は続けないといけない。

この写真は二〇〇七年、馬インフルエンザ発生の為に開催が中止されて、それが開けた直後に見られた物。

あの時は開催そのものがなくなり、無観客でも開催自体は続けられている今とは様相は違う。しかし、競馬をスマホやパソコンの画面越しでしか見られない現地派のファンにとっては競馬をお預け食らったような思いでいた。

競馬場に入って目の前で馬が駆ける姿を見たらその想いはきっとこの張り紙と同じ想いになるであろう。

日差しから暑さを、風から寒さを感じて美味しい物を食べながら競馬を楽しむ。そんな日常が帰っている事を祈っている。

たとえ白山大賞典の日でなかったとしても。再び競馬場の正門をくぐったときには、こう呟くだろう。

ただいま、競馬場。

おかえりなさい、「新しい」競馬のある日常。

白山大賞典 出走予定馬

今年も好メンバー！

九月二十日現在、白山大賞典に出走をするのではと報じられている中央、地方の遠征メンバーを見ると今年も勢いのある馬、実績のある馬が金沢に集まりそうである。

▼エルデュクラージュ（セ六歳）

二歳時に芝の重賞に挑戦して八着。それ以来の重賞挑戦。条件、リステッド、ＯＰ特別とダート二一〇〇ｍは四連勝中で白山のこの舞台は願ったりかなったり。初めてのダートグレートがどう出るか。今後のダート路線を含めて注目。

▼ナムラカメタロー（牡四歳）

今年の佐賀記念優勝馬。名古屋大賞典でも三着に入り地方競馬のコースの適性は問題なし。前走の大沼ステークスは一番人気背負っての十着大敗だが休み明けに初めての五八キロの斤量で度外視も可能か。金沢の舞台に「ナムラ」の冠名はよく似合う。ここから再び飛躍を。

▼マスターフェンサー（牡四歳）

今年のマーキュリーＣ優勝馬。三歳時にアメリカのケンタッキーダービー（六着）、ベルモントＳ（五着）を走った国際派。実績は抜けているのかもしれないが、二一〇〇ｍの舞台ではエルデュクラージュに連敗している。この金沢の舞台でリベンジとなるか。

▼ロードゴラッソ（牡五歳）

今年の名古屋大賞典、昨年のシリウスＳを制した重賞二勝馬。名古屋大賞典後は掲示板にも乗れない走りが続くがダートグレートではきっちりと走って結果を残す。昨年七着に敗れたＪＢＣに向かってここからまた上げていく。

▼ロードレガリス（牡五歳）

中央でデビューするも未勝利で大井へ移籍。そこで四戦三勝して中央に復帰。勢い止まらず一気にＯＰまで駆け上がる。その勢いで臨んだ初めての重賞は大敗。それ以来の競馬で立て直されているか。馴染んだ地方の舞台で初めての重賞を狙う。

補欠

▼ヒストリーメイカー（牡六歳）

ヒストリーメイカー
Photo by ゆうか

中央でデビューするも二桁着順連発で金沢へ。ここでＣ二クラスからスタートして一年間で重賞出走まで上がる。中央に戻って五百万下からリスタートすると一年でＯＰまで上がる。下剋上を地で行くような競走生活。思い出の地、金沢でもう一発下剋上を叶えたい。

◇◇◇◇◇◇　**他場遠征馬**　◇◇◇◇◇◇

▼リンノレジェンド（北海道牡四歳）

トライアルイヌワシ賞を制して堂々の出走。レースは圧巻の大差勝ちで地方勢の最有力になるか。

▼リンクスゼロ（笠松　牡六歳）

最後の勝利が去年の八月、馬券圏内は今年の四月。笠松移籍後は掲示板もなし。厳しいが頑張れ。

▼グランドサッシュ（名古屋牡九歳）

中央時代はダートの中距離、芝の長距離が主戦場。距離はいいが九歳でどこまで抗うか。

▼ホーリーブレイズ（大井　牡六歳）

中央時代にＯＰまで行くも結果を出せず。前走は大井の重賞を一番人気で大敗。どこまで巻き返すか。

◇◇◇◇◇◇　**地元勢**　◇◇◇◇◇◇

▼ティモシーブルー（牡五歳）

昨年は地方勢再先着の五着。今年はスプリングＣを制するも百万石賞、イヌワシ賞では不完全燃焼。金沢の大将として今年も好走を狙う。

▼サウスアメリカン（牡五歳）

今年の百万石賞を六番人気の低評価を覆しての勝利。金沢では一番人気は一回だけ。好走する時は大体人気薄。この大舞台でアッと言わせる。

▼ロンギングルック（牝四歳）

昨年の石川ダービー馬。四歳になって結果が出なかったが徽章賞で重賞制覇。牡牝混合では結果が出ていないがダービー馬の意地を見たい。

ロンギンルック

補欠

▼ハクサンアマゾネス（牝三歳）

今年無敗でダービーを制覇。初めての古馬との対決がこの大舞台となったならばその経験が来年以降の糧となるだろう。

KRC NEWS

リンノレジェンド圧勝！

白山大賞典ＴＲ　イヌワシ賞

無観客開催が続く九月一日。金沢競馬場で白山大賞典ＴＲイヌワシ賞が行われた。

一番人気は地元重賞三連勝のあとマーキュリーＣ三着の岩手のランガディア、二番人気に前年ダービーＧＰを含む重賞三勝馬北海道のリンノレジェンド。ここに地元金沢のサノサマーなどが続き、全国からやってきた好メンバー九頭で行われた。

好スタートからハナを奪ったのはリンノレジェンド。金沢の名手吉原騎手の手綱に導かれて先頭でレースを進める。二番手に大井のスギノグローアップやランガディア、金沢のティモシーブルーなどがほぼ一塊で追走。やや縦長の展開。

レースが動いたのは向こう正面からコーナーにかけて。二番手各馬が手綱をしごいて仕掛けに入るが先頭のリンノレジェンドとの差は一向に縮まらない。それどころがその差は広がっていく。吉原騎手の手はそれほど動いていない。

最後の直線に入るとリンノレジェンドはぐんぐん後続馬を引き離していく。スギノグローアップとランガディア、ティモシーブルーの二番手争いなぞ見向きもせずに一人旅、そのまま独走のゴール。二着に二秒一差の圧勝劇だった。

リンノレジェンドは重賞四勝目で白山大賞典の優先出走権を得た。

鞍上の吉原騎手は金沢の重賞三連勝と勢いは止まらない。翌週も重賞制覇して四連勝となった。

本番の白山大賞典。リンノレジェンド、吉原騎手両者の活躍に期待。

無観客の間何があった？ 2020年 前半を振り返る

今年の出来事は？　と聞かれて「コロナ」以外の出来事を何か思い出せるだろうか。出たとしてもオリンピック延期位か。

ファンが競馬場に入れない間、こんな事が起きていた。

▼二〇二一年、ＪＢＣ金沢開催

写真は前回のとき

二〇一三年の、あの興奮が金沢に帰ってくる！

三月のこと、二〇二一年のＪＢＣ競走が金沢競馬場で実施されると発表された。三競走の距離は前回と同じくクラシックが二一〇〇ｍ、スプリントが一四〇〇ｍ、レディスクラシックが一五〇〇ｍとなる。

また前回は一万二五六九人の来場者があった。前回とは違って今回は北陸新幹線が開通し、コロナ次第ではあるものの、さらなる来場者が期待できる。

この年のＪＢＣでは、クラシックで地元金沢のジャングルスマイルが大健闘の四着に入った。

来年、ジャングルスマイルのような激走を見せる地元馬は現れるのか。来年への道のりはもう始まっている。

▼二〇二〇年前半の古馬重賞戦線

白山大賞典にも関わってくる古馬重賞戦線。

今年度最初の重賞を制したのは令和最初の年度代表馬ティモシーブルー。古豪のグルームアイランド、古馬になったタンクティーエーなどを下し、一番人気に応えた。

ティモシーブルー

これで今年はティモシーブルー中心で回ると思われたがそうはいかなかった。続いて行われた新設重賞利家盃（百万石賞トライアル）でも一番人気に支持されたが大井より転厩してきた元ＪＲＡオープン馬サノサマー二馬身の差を付けられて敗れた。

百万石賞ではブルーとサマーの二強対決、と思われたがここで利家盃四着だったサウスアメリカンが激走。六番人気の低評価をあざ笑うかのように優勝した。

こうして古馬重賞戦線は正に群雄割拠、下剋上も十分あり得る戦国乱世の様相となっていった。

夏を超え、秋となる頃にこれらを統一する王者が現れるのかそれともこの乱世が続くのか。

白山大賞典の出走馬も含めて注目していきたい。

▼二〇二〇年前半の三歳重賞戦線

乱世の様相の古馬に対して三歳はフジヤマブシとハクサンアマゾネスの二強対決の雰囲気が強くなっている。

三歳最初の重賞北日本新聞杯をフジヤマブシが強烈な差し足で制すと、ハクサンアマゾネスは新設重賞ノトキリシマ賞を無敗で制して石川ダービーで直接対決。ここでフジヤマブシの強烈な追い込みをクビ差凌いでハクサンアマゾネスが優勝。無敗のダービー馬となった。

アマゾネスが金沢三歳トップとなりＭＲＯ金賞で東海ダービー馬ニュータウンガールとダービー馬対決。最後の直線で二頭のダービー馬の一騎打ちになるかと思いきやフジヤマブシが直線一気の豪脚でニュータウンガール以下をまとめて差し切って優勝。三歳の勢力図はこの二頭を中心に回っていくことになるだろう。

秋のサラブレッド大賞典、古馬との対決、他場への遠征等々興味が尽きない今年の三歳世代。今年だけではなく来年以降の白山大賞典、その先のＪＢＣに向けてどのような走りを見せてくれるのか。楽しみはますます増えていく。

▼金沢競馬に新しい騎手が増える

四月五日に魚住謙心騎手がデビューを果たした。魚住騎手は大阪府出身で鋤田厩舎の所属。四月七日に初勝利を挙げて八月十六日現在二十勝、金沢のリーディング十二位と健闘している。中島、栗原と最近は若い騎手の台頭著しい金沢競馬に新しい風となるか。

また、六月二十八日より兵庫の木本直騎手が九月二十八日まで期間限定で金沢に参戦。木本騎手は兵庫県出身で昨年デビューの二年目。金沢では八月十六日現在二勝を挙げている。金沢での経験を兵庫に戻った時に生かせるように健闘は続く。

▼今年達成の記録

四月二十九日　米倉知騎手　一六〇〇勝

五月二十六日　青柳正義騎手　九〇〇勝

六月十六日　吉田晃浩騎手　一一〇〇勝

六月二十一日　畑中信司騎手　一〇〇〇勝

新人騎手や若手が台頭する中でもまだまだ負けられない中堅、ベテラン勢。さらなる記録の更新を期待したい。

▼吉原騎手、地元重賞四連勝

コロナの移動制限で今年前半他場での騎乗が少なかった吉原寛人騎手。その鬱憤を晴らすが如く夏の地元重賞戦線で大暴れ。

８月の読売レディスＣを皮切りに加賀友禅賞、イヌワシ賞、サラブレッド大賞典と怒涛の地元重賞四連勝を果たした。笠松の秋桜賞では落馬競走中止でケガが心配されたが、次の地元重賞金沢プリンセスＣで重賞戦線復帰。白山大賞典にもリンノレジェンドで挑む事が決定。重賞戦線を勝ち抜く鉄人振りを見せつける。

今年の金沢の重賞は残り七つ。あと何回口取りに参加するだろうか。

米倉騎手と青柳騎手

出張ゆうしゅん

転換点

緒方きしん

交流元年と呼ばれた一九九五年。これまで地方馬は中央移籍をしなければＧＩに出走できなかったが、その年からは地方所属のままＧＩに参戦可能になった。そのルール改正の初年度から、地方の期待に応えるように笠松からニューヒロインが登場した。

笠松所属で桜花賞・オークスを一番人気で迎えた名牝・ライデンリーダーである。

ライデンリーダーといえば笠松でデビューし、いきなり無傷の十連勝――さらには中央の重賞・報知杯四歳牝馬特別に参戦し快勝、連勝を十一に伸ばす活躍をおさめた牝馬だ。クラシックこそ勝てなかったものの、牝馬三冠は皆勤で、間違いなくその年のクラシック戦線を盛り上げた一頭だった。

しかしこのライデンリーダーは現役時代の二四戦において一度も「金沢」を走っていない。

いくら地方の活躍馬とは言え、地方競馬場は笠松・名古屋しか走ったことのない馬を金沢・白山大賞典の記念号で紹介するのは……と思う方もいらっしゃるかもしれない。だが、ライデンリーダーという名牝、実は金沢競馬がなければ生まれることのなかったであろう馬なのだ。

時はさらに遡って一九八一年、北海道早来町の吉田牧場に一頭のサラブレッドが生まれた。

祖母は一九六六年の桜花賞馬・ワカクモ、叔父は一九七七年の有馬記念などを制覇したテンポイントという超良血。当然のように周囲の期待も高く、中央デビューを果たすことになる。

その馬の名は、ワカオライデン。

中央デビューしたワカオライデンは三戦目で勝ち上がると条件戦二着を挟んで三連勝。暮れの短距離戦・セントウルＳでは二着と、クラシック戦線に縁はなかったが血統に恥じぬ活躍を収めた。

さらに翌年には繰り上がりではあったが重賞・朝日チャレンジＣを勝利して重賞ウィナーの仲間入りを果たした。

しかし天皇賞・秋では八着、マイルＣＳでは六着とＧＩの壁に跳ね返される。ＧＩでの惨敗後に人気を落とすが、当時二〇〇〇ｍの高松宮杯で二着に食い込むなど、良くも悪くも「重賞レベル」の実績馬として認識されていたように思う。

だがこのワカオライデン、デビューから常に脚部不安に悩まされていた馬でもあった。

彼の戦績表を眺めると、一九八六年七月六日金鯱賞（四着）の次走は、八七年七月七日金沢の特別戦となっている。実に一年間もの間、ワカオライデンは休養していたのだ。

その結果、中央の重賞戦線で活躍していたものの、休養期間の関係から移籍先の笠松では出走の機会が得られず、金沢に再度転厩した。

その金沢でワカオライデンは三戦二勝という成績を残し、最後のレースが第七回白山大賞典だった。当時は二六〇〇ｍで施行されたここで勝ちタイムは二分五六秒四と最遅タイのタイムであったが、金沢競馬の大一番として知られていた白山大賞典を勝利したことでワカオライデン復活を印象付けた。

その後笠松に移籍して六戦五勝という成績を残し引退。種牡馬となった彼は地方時代での活躍を認められ、三七頭もの牝馬を集める。その産駒が活躍をし、種牡馬としての才能を見出されて最大で年間種付け数九三にのぼる人気種牡馬となった。

これは、地方活躍で好印象をつけたことが大きかっただろう。

この種付け数は、半兄でありクラシック戦線で活躍したワカテンザンが約十年間の種牡馬生活で送り出した産駒数五五頭を大きく上回る。

血統としてはどちらも変わらぬ良血だったが、片や用途不明・死没不明という運命を辿り、片や地方のリーディングサイアーとしてＮＡＲグランプリにて特別表彰されたというのだから、金沢での復活劇がいかに大きな転換点となったかは想像に難くない。

ライデンリーダーの血は途絶えてしまったが、母父ワカオライデンのクラキンコが牝馬として初の北海道三冠を達成し繁殖にあがるなど、まだその血は脈々と繋がっている。

そんな名馬を生み出した白山大賞典。今年はどんな馬の「転換点」となるのだろうか？

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

競馬ブログ＆WEBフリーペーパー ゆうしゅん

『競馬の楽しさを、全ての人へ』をモットーに多彩な執筆陣が様々なブログを上げているインターネット上のフリーペーパーです。

掲載されているブログには中央や地方、海外の競馬情報はもちろん、競馬場グルメ、馬やそれに関わる人々、アートなどの馬事文化、イベントレポート等馬に関わる多様な内容が揃っています。

遊駿+の執筆陣とは一味違うテイストをお楽しみ下さい！

■ウマフリ公式サイト
https://www.uma-furi.com/

■ウマフリ公式ツイッター
@Uma_Free

ヘンシューチョーのつぶやき

初めての無観客開催。その影響で今回の遊駿+は製作に携わるメンバーが誰一人競馬場を訪れずに作る、そして誌面ではなくネット限定で出す初めての白山大賞典号だ。

そもそも出せるのか出せないのか迷い考え、夏に入った辺りで腹括って作るかと腰を上げたが、作り出すと思った以上に大変だった。

インタビューできないからネタがない、誰も競馬場に行っていないから写真もない、だいたい観客がいつ入れるかわからないから締め切りがいつになるのかわからない。

暗中模索ってこう言うの言うんだなと思いながら、資料や文章を捏ねくり回し、過去の写真を引っ張り出してどうにか組み立てた、そんな今号はどのように映っただろうか。

思えば最初に遊駿+を出したのが十四年前の二〇〇六年。その時も初めて作ると言う事で暗中模索。今号はある意味もう一回創刊号を作ったような、そんな感じだったのかもしれない。

創刊号はなぜ二度発行されないか。今回その答えがわかった気がする。こんな苦労して出すのは一度で十分、二度としたくないからだ。

来年はコロナが収束して白山大賞典号やＪＢＣ金沢号を通常の形で、通常の過程をもってして作りたいものである。